



徳嶺勝信

筆者がベトナムのホーチミンに初めて渡航してから15年がたちます。あらためて近くて遠い海外について話をしたいと思います。

私の在住しているホーチミンは東南アジアのインドシナ半島の東側に位置します。熱帯モンスーン気候で乾期と雨期に分かれます。

1年を通して気温の変化が少なく、年間の最低気温は20〜25度、最高気温は30〜35度、平均気温は26度と日中の日差しや雨期の時期のスクールをしのげば過ごしやすい気候です。沖縄と文化、風習がよく似たところもあり、沖縄人にとっては海外の中でも居心地の良い地域に当てはまると感じています。

その中で生活しながら日々思う事は、似ているとはいえず、文化、風習、歴史は異なる点も多く、長年、在住していてもその違いに驚かされる事が多々あり、共存する難しさを日々感じます。私たち沖縄人が培ってきた文化と彼らの文化は明らかに違うものであり、私たちの常識が、彼らの常識と違う事をしっかりと認識しなければな

## 互いの文化 理解し共存

ベトナム

りません。それを受け入れて、共存していかなければ、お互いに窮屈な社会が作り上げられてしまうでしょう。

現在、国会では海外からの労働者受け入れについて議論されています。少子高齢化が進み、人手不足が逼迫する中、日本経済を維持、発展する上で重要な問題だということとは理解できます。

今回の議論では、条件があるにせよ、永住権が取得できるという点が注目されています。しかも当事者だけではなく、配偶者と子供も含まれています。これまで日本は永住権の取得が世界で難しい国として挙げられてきました。逆に言えば、このハードルに助けられながら急激に外国人永住者が増える事はありませんでした。

しかしこれから急激に外国人永住者が増える可能性が出てきました。ベトナムからも多くの労働者が日本を訪れています。ここで大切なポイントは、受け入れる国民が外国人永住者の意図を理解して適切に受け入れ、共存できる準備ができていくかどうかです。

法整備も重要ですが、何よりも互いの文化を理解することが大切です。我々もまずは、沖縄の文化を改めて見詰め直す必要があると言えらるでしょう。(ベトナムJES代表)

次回は韓国の大嶺浩次・世一旅行社販売課次長です。